

温泉に戻ると、アーロン達も戻っていた。

再び散歩に出かけるという彼らに誘われ一緒に表に出ると、ちょうど向こうから歩いて戻ってくるウィンが見えた。手を振って合流すると、今度は4人揃って歩き出す。みんなそれぞれの稲城を楽しんだようだ。

アーロンは写真好きなのか大きなカメラを首からぶら下げ、あちこちでシャッターを切っている。チベットの経文が彫り付けられた岩の前で写真を撮りながら、「これは『オン マニ ペネ ホン』と書いてあるんだぜ」と教えてくれた。彼はチベット文化に興味があるようでなかなか詳しい。

しばらく歩いているうち俄かに空が曇ってきたと思うと雨がパラつきはじめた。合羽を着るほどでもないだろうと思っているうちに本降りになり、雨にぬれた衣服は急速に体温を奪っていく。先程まで炎天下で暑さにくだっていたのが嘘のようだ。急いで温泉まで撤退したが、戻った時には再び晴れ間が出てきていた。まったく高山の気象は変化が激しい。

「よーし、雨が上がったから今度はあっちの山を登ってみよう。」

「え〜！！まだ行くの〜！？」

まったくアーロンはタフな奴だ。大人しそうな感じなのに、そんなアーロンに付いて行ってるシャオチンもタフな女だ。私もタフさには自信があるが、今日はもう十分だった。雨に濡れた身体が薄ら寒くなっている上に、さっきから温泉が呼んでいるのだ。もう我慢できな〜い！！

「みんな行って来て。私は温泉に入るから！」

三人が出かけて行くのを見送ると、私は宿の女将さんに温泉に入りたいと告げた。

宿の庭には個室に別れたお風呂場が並んで造られており、若女将が出てきて「ここは準備ができてるわ」と一部屋の鍵を開けてくれた。陽の差し込む明るく清潔な浴室は手前に置かれたベンチに荷物や着替えが置けるようになっていて、浴槽には綺麗な湯が満たされていた。触ってみると丁度いい湯加減だ。お湯につかれるのは久しぶりだ。身体を浸すと、あまりの気持ち良さに自然に声が漏れてしまう。

湯船に寝そべるようにつかりながら天井を眺めると、木造の屋根の隙間から差し込んでいる陽の光がいく本かの筋になって浴室に降り注いでいた。溢れるお湯が外に流れ出るように、壁に開けられた排水口から覗ける外の

景色は、どこまでも緑の草原が続く美しい風景だ。

ああ・・・幸せ・・・

浴槽の縁には蛇口が2つ取り付けてあった。ひとつの蛇口からは宿のすぐ脇に湧き出してる源泉から引かれた温泉が、もうひとつの蛇口からは裏の山から流れてくる冷水が絶え間なく流れ出しお湯を溢れさせている。まさしく本物の『源泉かけ流し』の温泉だ。日本の温泉マニアが聞いたなら羨ましがるに違いない。なんて贅沢な幸せだろう。

温泉と冷水の蛇口をひねって湯量と水量を調節すると自分の好みの湯音に調節できた。

しばしお湯につかれる幸せに浸った後、ベンチに置いてある荷物の中から一冊の文庫本を取り出した。

成都で泊まっていた宿で借りてきた物だ。どこの国でも長期旅行者が集まるような宿には本棚があり各国の旅人が置いていった文庫本などが並べられていることが多い。読み終わってしまった自分の本と取り替えることも出来る。一人で過ごす時間の長い一人旅には一冊の文庫本が良い友達になってくれるのだ。食事の時に料理が運ばれてくる間や、なかなか来ないバスの待ち時間、ちょっとした休憩でお茶を飲む時などのんびり読書するのはいい気分だ。そして普段の生活でもゆっくりお風呂につかるのが好きな私は、湯船につかりながら本を読むのが大好きなのだ。

成都を出てから毎日が忙しくてまだ取り出したことのない文庫本を、温泉に身体を浸して読み始めた。ああ〜。最高に幸せだあ・・・

しばらく読書に耽った後、身体を洗った。洗い場にあたる場所はないので、欧米式に浴槽の中を泡だらけにして髪と身体を洗った。洗い終わった後はお風呂の栓を抜き、一度全部お湯を流してしまうと温泉の流れ出てくる蛇口のお湯で身体をすすぎ、浴槽内に残った泡を洗い流すと再び栓をして新しいお湯をためた。

のんびり入浴しているうちに、いつしか日も暮れてきて個室温泉の中にも灯あかりが灯ともった。きっと宿が自家発電を始めたのだろう。屋間の木漏れ日温泉も良かったが、薄暗い裸電球の温泉も秘湯ムードが盛り上がっていい感じだ〜。久しぶりのお風呂があまりに気持ち良くて、結局2時間も温泉を満喫してしまった。

私が個室温泉から出ると、丁度アーロンとシャオチンも上気した顔で髪をタオルでぬぐっている所だった。浴

室から出てきた私を見た二人は、「え～！今まで入ってたのお～？」と驚いていた。「俺達は山に登って帰ってきてから、風呂に入ったんだぜ」

宿の縁側の柱には鏡が取り付けられ、ドライヤーが置かれていて自由に使えるようになっていた。こんなところにも宿の人の心遣いが行き届いている感じだ。私の髪は長いので、夜間冷え込むこのような土地では風邪を引かないようにしっかり乾かしておきたいのだった。なんて気が利いている温泉なんだ～。

ドライヤーで髪を乾かしていると、向かい側の浴室からチベット人男性が二人温泉から上がってきた。庭には派手な飾りのつけられたバイクが二台停められている。稲城の街から温泉に入るためにやってきたのだろうか。以前チベット系の間はお風呂に入らないなどと書かれているのを何かの本で読んだことがあるけど、あんなの嘘だな～。

バイクに革ジャン姿の彼等が、鏡に向かって首を傾け櫛で髪を整える姿が、絵に描いたような伊達男ぶりで面白い。見つめていると照れくさそうにニコッと笑った。

お客が使った後の個室温泉はすぐに宿の人がお湯を落とし、ブラシでこすって掃除していた。掃除がすむと又栓をして次のお客のために新しいお湯を満たしておくのだ。ここの温泉は日本よりずーっと清潔だ。

宿の部屋がある二階に上がるとお風呂上りの三人がテラスのベンチでくつろいでいた。アーロンは宿の人に分けて貰ったらしいチベット人のお酒をチビチビやり、ウィンは熱心に今日の出来事を日記に書いている。

シャオチンが「温泉で洗うと髪がツルツルになるよね？」と言うので自分の髪を触ってみると本当にいつもよりしなやかだ。私も並んで座ると、ゆっくり暮れていく景色を眺めながらみんなと旅の話などを語り合った。

同じ土地で出会う旅人同士は初めから志向するものや話題に共通性があるので、すぐに打ち解けあえてしまう。アーロン達やウィンにも既に今朝知り合ったばかりとは思えないくらいに親しみがわいていた。新しい友達に出会うことも出来て、今日も一日楽しかった。おだやかな夕暮れだった。

完全に日が沈んだ頃、階下から宿の女将の呼び声が響いた。食事の用意が出来たと呼んでくれているのだ。家族の暮らしている一階の部屋に置かれたボロボロのソファーに並んで腰掛けると、テーブルの上にはスープと炒め

物とご飯が鍋ごと置かれていた。決して豪華な食事ではなかったが、料理屋とは一味違う心のこもった家庭料理の味はとっても美味しかった。

テーブルの周りを幼い子供が走り回り、向かい側の椅子に腰掛けている年老いた女将がニコニコしながら、たくさん食べなさいとお替わりを勧めてくれる。宿の宿泊客というよりは、知人の家に遊びに来ているみたいな雰囲気だ。

いつの間にか部屋の隅に若い大人しそうな男性が座って微笑んでいる。きっとこの宿の若旦那なのだろう。ここの家族はみんなニコニコしている。幸せなんだな。

お鍋をスッカリ空にすると、宿の女将さんがバター茶を振舞ってくれた。お茶というよりはしょっぱいスープのようなイメージのこの飲み物は、実はちょっと苦手なのだが、ここの宿の味が濃くてコクがあり、いつもより少し美味しく思えた。三年前と今回の旅でチベット民族の人たちに好意を持っていた私は、どこに行っても振舞われるこのバター茶も好きになりたいものだと思っていたのだが、もうちょっとで好きになれそうだ。

食事を終えて宿の人と話しているうちにそろそろ9時になろうとしていた。

明日は4時に出発予定だ。3時半には起きたいので、もう眠ったほうがいだろう。二階の部屋に戻り明日の朝起きたらすぐに出来るように荷物を準備していると、階下から年老いた女将がお湯の入ったポットの他にホーローの壺のようなものを持って上がって来て「夜は暗くてトイレに行くのが大変だから」と壺を部屋に置いていった。一瞬意味が分からずキョトンとしてしまう。

「・・・つまり、これで用を足すって事～！？」女将の心使いはありがたかったが、思わずウィンと顔を見合わせ笑ってしまった。

翌朝三時半に合わせていた目覚まし時計が鳴った。

手探りで懐中電灯を探り当てるとすばやく身支度をすする。高度の高いこの土地は夜間から早朝にかけてはかなり冷え込むのだが、ここの宿ではいつでも湧き出している温泉で朝からお湯で顔を洗うことができるのだ。なんという幸せ。

今度はちゃんと約束の4時にタクシードライバーの車がやってきた。さあ、いよいよだ。今日こそ本当に亜丁に向かって出発するんだ。前部の助手席にアーロンが座り、後部座席にシャオチン、ウィン、私が並んで乗り込むと車は真っ暗な道を亜丁に向かって走り出した。(続く)